

伊丹市 文化財ボランティアの会

発行 : 伊丹市文化財ボランティアの会

発行所: 伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課内 (伊丹市千僧1-1-1)



INDEX

- ・第30回文化財ボランティア養成講座を振り返って
(令和6年11月) ----- P1
- ・第30期新人会員の紹介 ----- P1
- ・研修サロン班活動報告
 - 近隣市シリーズ『尼崎南西部 神崎駅～神崎宿を訪ねて』 - P2
 - 伊丹旧村巡り『幕末の景勝地 有岡八景』 ----- P3
 - 下り酒の積み出し地「伝法」を訪ねて----- P4
- ・学習支援班活動報告
 - いたみ民話会公演レポート(わかばこども園) ----- P6
 - ・令和6年度研修旅行 ----- P7
 - 『あおによし平城(なら)の都を歩く旅～平城京と西ノ京を巡る』
 - ・特集 ----- P9
 - ユネスコの無形文化遺産になった『日本の伝統的酒造り』とは?
 - ・《ガイド勉強会活動報告》了福寺拝観記 ----- P11
 - ・活動記録と今後の予定・P12

伊丹市内ボランティアガイドのご案内

伊丹市内にある文化財(史跡)のガイドをご希望される方は

伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課 文化財担当まで (☎:072-784-8090)

または文化財ボランティアの会にメール (ibunbora@yahoo.co.jp) でお申込みください。

【ガイドコース】

- A コース: 有岡城跡・荒村寺・市立伊丹ミュージアム(旧岡田家・旧石橋家)・猪名野神社など
- B コース: 猪名野神社・伊丹緑道・白洲屋敷跡・辻の碑・伊丹廢寺跡など
- C コース: 昆陽池・東天神社・山陽道(西国街道)・昆陽寺など
- D コース: 鴻池神社・慈眼寺・鴻池稻荷祠碑・容住寺・天日神社など
- E コース: 御願塚古墳・都市景観形成建築物・須佐男神社・南野神社など
- F コース: 有岡城跡・桑津神社・加茂神社・称名寺・春日神社・伊丹スカイパークなど

今回の養成講座は、従来全8回の講座で行っていたものを4回に変更、とりわけ受講生自身によるガイド実践が省かれた点に特徴のある講座構成となりました。

養成講座の締め括りとして、11月23日（土：勤労感謝の日）、有岡城跡から荒村寺、破戦道、大溝跡、町家域堀跡、三軒寺、猪名野神社、そして旧岡田家住宅・酒蔵までを当会会員が受講生をガイドしました。前回までの「養成講座」は一般参加を募集しましたが、今回は受講生養成を目的としたため一般参加者は募集しませんでした。



また、令和6年（2024）は「荒木村重伊丹入城450年、旧岡田家住宅酒蔵築350年」に当たる記念すべき年でもあり、「村重の城下町から伊丹酒造りの町へ」をキャッチフレーズに、集合から2時間半で受講終了証の手渡しまで終えられるよう、主催者の伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課文化財担当と7月の暑いうちから打ち合わせを重ねました。

当日のガイドは、当会会長の末次会長、会員の山本、玉浦の3名で行いました。当日は、9:00までに有岡城跡をひととおり見廻り、ゴミ等が散らかっていないことを確認してから、カリヨン塔前で文化振興課の中畔さん、岩田さんと共に受講生を待ち、定刻9:15に開始しました。

先ず主催者側から中畔さんが挨拶、次に末次会長が当会の紹介をされ、歩き始めました。祝日のため三軒寺前の広場がにぎわっており、法巖寺、正善寺、大蓮寺の説明と広場でダンスをする人々の催しのタイミングが重なり、ダンスBGM音により説明に支障をきたした事以外は、円滑にガイドは進められ、旧岡田家住宅・酒蔵における修了証書の交付までを予定通りに実施出来ました。

なお、養成講座修了者4名の中から3名の方が第30期生として当会に入会されました。当会会員は我が町伊丹を多くの方に知って頂き、愛して頂くために、日々小さな努力を重ねています。ぜひ協働=Co-productionをお願い致します。

（玉浦 記）

第30期新人会員の紹介

令和6年11月の第30回文化財ボランティア養成講座を修了し、新しく会員になられた3名の方々の自己紹介です（敬称略）。みなさん、よろしくお願いします。

大西 和昭（おおにし かずあき）

齢75にして入会させていただきました。老化と“モウロク”との併走になります。ご迷惑を掛ける事の方が多いかと思いますが、なんとかお役に立てれば、と。

郷町が気になって応募に至った次第ですが、徐々に見聞を広め、自分も楽しむことができればと考えています。

4月からの入会を考えていましたが、会長はじめ皆さんの柔らかいコンタクトにほだされて会費を早々に納めることになりました。3月まで

はほぼ休眠状態になるかとは思いますが、宜しくお願ひいたします。

山口 憲二（やまぐち けんじ）

家の近くの「ラスタ」で文化財ボランティア養成講座の紹介パンフレットが目に止まり、何か新しい世界が開くのを感じ、入会させていただくことになりました。

私が伊丹の歴史文化に初めて触れたのは「お酒」でした。在学していた大学の研究室が灘の

酒蔵地区の景観保全に関わる調査をしており、その一環として伊丹の酒蔵を訪れました。私は写真撮影のお手伝いくらいだったのですが、白雪の千秋・万歳蔵を案内していただき、内部の木組みや屋根架構の力強い美しさ、白壁に大屋根の載る外観、南側から見る妻壁の美しさが印象に残りました。そして灘・伏見の歴史的な酒蔵をめぐり利酒などさせていただいているうちに、すっかり日本酒に目覚めてしまいました。

縁あって伊丹で家庭を持ってから早や50年ほどになりますが、若い頃、年の暮れに国鉄伊丹駅から産業道路を渡って長寿蔵の横の細い通りに入ると新酒の香りが漂い、熱爛恋しく家路を急いだことなど懐かしく思い出します。今ではもう千秋・万歳蔵も新酒の香りもありませんが、文化財になった旧岡田家酒蔵と共に長寿蔵も活用され伊丹郷町の新しい魅力をつくっているのは嬉しく思います。

このようなことを書いていると、また一杯やりたくなってきますが、これからは、お酒のほか伊丹の多くの歴史文化財について学び、また、それを伝えていく上でお役に立つことができればと思います。よろしくお願ひします。

山下 秀雄（やました ひでお）

兵庫生まれの大坂育ちです。社会に出て、全国転勤のある会社に勤めましたので、神戸を皮切りに東は東京、西は宮崎と7カ所勤務しました。伊丹は、鈴原町4年、瑞穂町30年住んでいます。

一昨年の退職をきっかけに、失われた47年（勤務年数）を埋めるべく、自分のやりたい事探しを始めました。その一つ、ラスタホール講座、伊丹の歴史と文化財〈史跡めぐり編〉に、令和5、6年と参加し机上の講習だけではなく、実際に歩いて見て、史跡の歴史に触れる楽しみを知りました。更に、伊丹の歴史の知識を深めると共に、今後は、一人でも自分のような人を増やせたらと、ボランティアの会に入りました。

現在、阪神シニアカレッジに在籍しておりますスケジュール調整しながら参加させていただきたいと思います。宜しくお願ひします。

《研修サロン班活動報告》

近隣市シリーズ『尼崎南西部 神崎駅～神崎宿を訪ねて』 令和6年10月17日

10月17日(木)、晴天に恵まれ、村正司さんの案内で、新人4名を含む総勢10名、かつての神崎駅(現在のJR尼崎駅)から神崎宿を探索しました。

JR尼崎駅は、1874年に敷設された鉄道大阪一神戸間の停車駅、「神崎停車場」です。日本初の鉄道敷設のわずか2年後のことです。鉄道と共に発展してきた尼崎市の歴史について、村さんから説明を受けました。私は5年間駅に通っていたのですが、知らないことばかりでした。

最初に、駅北へ。商店街の角に、東大寺領猪名荘跡の碑がひっそりと建っていました。756年、孝謙天皇が東大寺に施入したことに始まる荘園ですが、現在は潮江東大寺公園にその名を残すのみです。商店街の下に荘園跡が埋まっているとは、歴史の変遷を感じます。近くに潮江岡村邸が



ありました。ツシ二階建て、茅葺屋根の際立った規模の農家で、屋敷全体が周辺を圧倒する雰囲気がありました。

次に、伊邪那岐(いざなぎ)神社へ。次屋と浜の両村によって奉斎されているこの神社は3つも鳥居を備えていました。境内は広く、義人弥治右衛門の碑もありました。代官の悪政を直訴して江戸で獄死した義民伝中の人です。保育園児が遊んでいました。今も昔も、地域の人が集う大切な場所なのでしょう。

更に、西川八幡神社へ。境内には二抱え程のタブノキがそびえます。北西に「尼崎藩領界碑」が建っています。当時の市域内は、藩領と他領が多く入り交じっていたとか。

神崎橋の袂で一気に視界が開けました。陽光きらめく神崎川、一級河川です。川沿いに歩きます。金毘羅さんの石灯籠が青空に映えます。神崎の津は、都と西海を行き来する船と人で賑わう河川交通の要衝。石灯籠は、昔日の繁栄の証です。金毘羅大権現は海上守護神で、石灯籠は灯台の役割を果たし、働く人々からの寄付で建立されました。人々の祈りが込められていると感じます。

近くの田中正三邸は、平入切妻造、厨子(つし)二階の堂々とした町家で、尼崎市の「まちかどチャーミング賞」を受賞しています。ネイミングの妙に頬がゆるみました。田中邸西角の道標は、有馬道の起点を示します。すぐそばの三叉路にも地蔵道標があり、「右 伊丹中、左 尼崎西」と刻まれていました。有馬道から来る伊丹の酒は、神崎から積み出され、猪名荘園の年貢米も、神崎を経由して奈良東大寺へと運ばれていたでしょう。角の民家の金属プレートに、「神崎村100年前の商店マップ」が書かれ、当時の様子が偲ばれました。



そして、最後の目的地、遊女塚へ。河口の港町として栄えた神崎は、平安の都人に『天下第一之楽地』と評され、諸芸を披露する遊女が多く集まりました。鎌倉時代、法然上人の法話を聞き、身の罪業を恥じた5人の遊女が入水自殺。その供養碑の前で、手を合わせました。遊女塚は予想以上に立派で、バス停の名称が「遊女塚」であることにも驚きました。



尼崎には、潮江、長洲、浜、杭瀬、尾浜、上ノ島など海に関わる地名があり、不思議に思っていました。古墳時代の尼崎は、多くが海だったと学び、疑問が解決しました。探索を終えて、歴史の痕跡の積み重ねから、遠い日の神崎宿の賑わいが、浮かび上ってくるようでした。

(関記)

《研修サロン班活動報告》

伊丹旧村廻り『幕末の景勝地 有岡八景』

令和6年11月29日

11月21日(木)9時30分 三軒寺前広場集合、小春日和の中、12名が参加しました。

今回は平成30年(2018)5月19日(土)木曜班担当「文化財市民ガイド」のリバイバルです。松田孝雄さんが案内をされ、郷町の端を三軒寺広場より時計廻りで散策。

さあ、令和から江戸時代へタイムトリップです。
法嚴寺の西から大きな楠を見上げて進みます。

①西台の夕照・・・東りいたみホール南より、西を眺めます。当時は耕作地、甲山と六甲の山並みに夕日



が輝いていたでしょう。今はビルの間から山々が望めます。いたみ緑道の暗渠、道沿いにひっそりとたたずむ遊女塚前を通ります。

②野村の晩鐘・・・発音寺の鐘は戦時中に供出され、鐘楼も残っていません。

「有岡古続語」には「鐘の音甚だよし、伊丹中によく聞へて勝手よかりし也」との事。他の鐘とは違う良い響きが郷町の人々に安らぎも与えていたのでしょう。

そして、郷町の東へ向かう道は、細い生活道が上がり下がりと続きます。伊丹台地の高低差を体感します。



③天津の落雁・・・今は工場などで藪もありません。

④雲正坂の夜の雨・・・駄六川へと続くこの坂では馬だけでは無く牛も酒樽を運んでいたとか。実は夜は危険な場所であったとも。そして北側の斜面には何と防空壕の入り口の戸が残っていました。



⑤城山の秋の月・・・西側から城跡を望むと石垣の上に月明りで木々の影が浮かび風情があったことでしょう。

⑥破戦道の帰帆・・・東を眺めると神津大橋が見えます。そこから海へと思いを馳せたのでしょう。郷町の東の外、この道の先には洪水で流されるまで古市場村があったとの事。その村人はこの古城をどう思って見上げていたのでしょうか。

⑦鶴塚の暮雪・・・個人宅であるが薬師堂は今も祭られているとか。藪の外から拝見。

⑧猪名野の晴嵐・・・東リの看板の前に背の高いオカメザサと背の低いネザサが2種類植えられています。ある学者によるとこの頃はオカメザサではないかと言われています。

今回は古地図と見比べながらの散策でした。伊丹台地の上から耕作地、川、広がる笹原とそれぞれ違った景色が織り込まれています。八景の他にも、加茂井の滝地蔵、暗渠、個性的な坂の名前など、松田さんの「町の小さな文化財」の感覚での小径を通り、興味深い所が沢山ありました。

旅人は帰国してから伊丹の銘酒で口福、帖で眼福と又楽しんだのでしょう。伊丹の良い思い出に貢献した先人の知恵と才覚に感服です。

(妹尾 記)

《研修サロン班活動報告》

下り酒の積み出し地「伝法」を訪ねて

令和6年12月19日

12月19日（木）12名の会員がJR西九条駅に集合、岩崎さんの案内で此花区伝法界隈の探索に出かけ、寒い季節風のあいにくの天気にもめげず、無事に予定コースを終えました。

伝法地区は淀川と現在ほぼ埋め立てられた正蓮寺川に挟まれた場所に位置し、以前、地区にあった伝法川はすでに埋め立てられている。淀川も明治末期に拡幅がおこなわれ、かつての下り酒の積み出し地の頃とは様子が一変している。しかし、街内を探索すると当時の生活ぶりを示すものが残っている。伝法は江戸に酒樽を運搬する樽廻船の出発地点であり、下り酒の集積地として賑わった。当時の繁栄の名残りを求めて街並みを探索した。以下訪ねた個所を順番に示します。

◆安治川隧道

JR西九条駅を出発して、まず最初に安治川を横断する安治川隧道を訪ねた。安治川を横断するのに船舶通航に支障のないように橋を架設するのではなく、川底トンネルを設置したもので、昭和19年（1944）に完成した。土木学会が平成12年（2000）に設立した制度『土木学会選奨土木遺産』で認定

された戦前唯一の道路用河底トンネルである。トンネルの主要部分は、陸地で製作した鉄筋コンクリート製の沈埋函（ちんまいかん）を船で運び、河底に掘った溝に埋める『沈埋（ちんまい）工法』で造られた。当初は車両の通行も可能であったがその後車両通行は禁止され、人と2輪車の通行のみとなつた。地下通路までの昇降用に2輪車も搭載できるエレベーターが設置されている。現在も地域住民の生活道路として利用されており、会員一行もトンネル内部を歩行見学した。

◆鴉宮（からすのみや）

最近埋め立てられた正蓮寺川の森巣橋を渡ったところに鴉宮が鎮座する。秀吉が朝鮮出兵時に海路の安全を祈願したところ、三本足の靈鳥八咫烏（やたがらす）が軍船を守ったと伝えられている。これに感激した秀吉は神社の名称を鴉宮に改め、現在地に遷宮したと言われている。航海安全の神様らしく社殿正面には船の舳先が突き出して配置されている。



八咫烏

◆鴻池組旧本店・旧本宅

明治43年（1910）に建てられた木造二階建ての洋館と東側和館の和洋併置型建物。洋館・和館ともに当時の建築様式・調度品を残しており、国の登録有形文化財（建造物）に指定されている。昭和43年（1968）まで鴻池組本店として使用されていた。建物内部の一般公開が春秋の年2回ほど実施されている。



鴻池組旧本店

◆澪標（みおつくし）住吉神社

社伝によると延暦年間（9世紀初頭）に遣唐使の航海安全を祈願して祭壇を設け、一行の帰路を迎るために澪標を立てたのが始まりと言われている。大阪の繁栄は水運に負うところが大きく、港にゆかりが深い澪標が明治27年（1894）大阪市の市章となった。同神社は海上交通安全の神として信仰を集めている。



大阪市市章



神社境内の澪標

◆伝法山西念寺

大化元年(645)天竺南山道宥律師の教伝により、法道仙人が仏法伝導道場を建立されたのがはじまりという。中世には摂津伝法の船寺として信仰を集め、広大な寺領を持ち、摂・河・泉・三国の四大本山の一つとして栄えたという。明治6年（1873）には小学校（現伝法小学校）が当寺に設置されていた。



西念寺の門前にて

◆庚申堂

庚申堂は庚申信仰にもとづいて建立される仏堂のひとつである。もとは明暦4年（1658）に建立された愛宕神社内の境内にあった。明治42年（1909）に愛宕神社は澪標住吉神社に合祀されることになったが地元の強い要望で庚申堂だけは当地に残ることになった。申（さる）を施した彫刻の飾りがあることから申神社とも呼ばれ、今も人々の信仰を集めている。淀川堤防近くの住宅が立地込んだ中にお堂がある。小さなお堂内部には灯明が灯って読経が響いており、信仰が受け継がれていることを実感した。



庚申堂

◆伝法川跡碑

伝法は河川水路と海路の分岐地点にあり、酒類等の積荷の集積地として賑わったが、安治川の改修により港としての機能は安治川方面に譲ることになった。また新淀川の拡幅により河川としての役割がなくなり、新淀川に接続する個所に水門を設け、一部を船溜まりとして残す他は埋め立てられた。現在は埋め立て部の起点と終点に伝法川跡の碑が建てられている。



川跡碑 起点側

◆正蓮寺

日蓮宗の寺院で、寛永2年（1625）正蓮日實が小庵を建立したのが始まりと伝えられている。かつては七堂伽藍が備わり、大阪25カ寺に数えられていたが、火災・地震で滅失した。



正蓮寺

現在の本堂は明治7年（1874）に再建された。毎年8月26日に行われる川施餓鬼は日本三大施餓鬼として江戸時代から有名で、大阪市無形民俗文化財に指定されている。

（松田 記）

研修サロン班 活動報告		
■尼崎南西部 神崎駅～神崎宿を訪ねて 10/17（木）屋外研修	■有岡八景 11/21（木）屋外研修	■伝法 (下り酒の海運あれこれ) 12/5（木）勉強会 12/19（木）屋外研修

《学習支援班活動報告》

いたみ民話会公演レポート(わかばこども園)

令和7年1月15日

1月15日(水)、アナログ版の紙芝居2本を携えてメンバー9人というちょっと大人数？！でわかばこども園を訪問しました。演目は、対象者が代わるということでいつもの『野間の一本松といたずら狐』と『三軒寺の砂かけ狸』です。対象は年長さん(5歳児)の3クラスです。この子どもたちは次年度から、小学校にあがります。



まず、紙芝居を始める前の導入として、植田さんが昔と今の航空写真を見せながら、紙芝居の舞台となっている“野間”周辺に田んぼが多かったことや、こども園や小学校の場所などを説明しました。最後に子どもたちに「どこの小学校に行くの？」「笛原小学校？」「南小学校？」「鈴原小学校？」「摂陽小学校？」と順番に聞いていきました。会場は和み、和気藹々とした雰囲気になりました。

これからが紙芝居のはじまり、はじまり。デジタル版ではない、アナログ版の小さな紙芝居。最初は誰がセリフを言っているのかが気になり、しきりに私たちの顔を見、その後、紙芝居に目を向けていた子どもたちでしたが、すぐに紙芝居に夢中になり、目は紙芝居に集中していました。子どもたちのキラキラした瞳、食い入るように物語を聴いてくれる姿に、私たちの方が生きるエネルギーを貰えた交流会でした。帰り際に、手を振り、笑顔を振りまいてくれた子どもたち。窓際でハイタッチしてくれた子どもたち。思い出はいつまでも続くと思います。



（松山 記）

令和6年度研修旅行

『あおによし平城(なら)の都を歩く旅～平城京と西ノ京を巡る』

令和6年10月22日、伊丹市文化財ボランティアの会主催研修旅行「あおによし平城（なら）の都を歩く旅」に、企画・運営・現地案内担当者として参加した。今回の参加者は例年より多めの17名で、唐招提寺、薬師寺、法華寺、平城宮跡を巡る計画である。

集合は近鉄西ノ京駅改札口に午前9時30分としていたのだが、午前8時2分JR伊丹発長尾行きの前から2両目に乗車することを伝えていた。JR伊丹駅では11名が乗車、隣の猪名寺駅で残りの6名が乗車し、結局全員揃って行くこととなった。

京橋駅で環状線に、鶴橋駅で近鉄奈良線に乗り換えた。大和西大寺駅で近鉄橿原神宮線に乗り、午前9時20分に西ノ京駅に到着。午前9時30分に改札口で当日の予定を説明して、いざ出発。

最初の見学スポットは唐招提寺。1,000円の拝観料を払って、南大門をくぐるとすぐに目に入るのが金堂。本尊の盧舎那仏坐像、千手觀音菩薩立像、薬師如来立像などの国宝仏がずらりと並び壮観である。次に境内の西にある戒壇を見学。出家者が正式の僧となるための受戒の儀式を行う場所。鑑真是戒律を授けるために、日本に招聘された高僧で、唐招提寺の原点となつた建築物であろう。境内中央部に戻る。平城宮東朝集殿から移築された講堂は本尊が修理中ということで中に入ることができなかった。講堂の前に鐘楼と向かい合う形で建つ鼓楼には銅造の金龜舍利塔が納められていて、舍利殿とも呼ばれる。舍利塔には鑑真和尚が唐から持って来た3,000粒の仏舍利（釈迦の遺骨）が入っているという。



唐招提寺金堂

開山堂には、鑑真和尚御身代わり像が安置されている。御影堂内にある国宝鑑真和尚坐像は6月5日～7日に限定公開されることもあり、毎日参拝できるよう制作されたもの。開山堂の前に芭蕉の名句が掲示されている。「若葉して御目の零拭はばや」。

御影堂の前では、鑑真和尚坐像の写真を見てもらい、脱活乾漆造りであることを説明。鑑真和尚の御廟所に参拝をして、新宝蔵に入館。いつもは行基菩薩坐像が安置されているのだが、現在秋季特別展を開催中につき、収蔵庫でお休みになっていた。唐招提寺創建時の扁額（孝謙天皇揮毫）、平成大修理前に金堂に設置されていた鳴尾、聖徳太子十六歳像などが代わりに展示されていた。宝蔵、経蔵を見学して、午前10時50分唐招提寺を後にした。



薬師寺東塔

午前11時に薬師寺に着き、1,000円を払って拝観。先ずは東院堂から始めた。聖觀世音菩薩立像（国宝）が安置されている。像高189cmのすらりと美しく、気品と端麗さを備えた飛鳥時代後期～奈良時代の金銅仏代表作の一つである。このお堂に薬師寺の住職だった行基の像が安置されている。西塔と東塔を見学する。西塔は1981年の再建。東塔は創建時から残る建築物で、2009年から10年かけて解体修理が行われた。金堂は1976年に再建された。本尊の薬師三尊像を拝観する。薬師如来は東方淨瑠璃淨土の教主で、人々の身と心の健康を守ってくれる。向かって右に日光菩薩、左が月光菩薩であわせて薬師三尊という。「がっこうぼさつ」と説明したところ、ずっと「げっこう」だと思っていたと、のたまう人がいた。ベートーベンのピアノソナタ第14番ではないのだから……。

大講堂は2003年の再建。正面41m、奥行20m、高さ17mの規模で、伽藍最大の建造物である。本尊は弥勒三尊像だが、2003年より呼称を「薬師三尊」から「弥勒三尊」に変更した。裏側に回ると「仏足石」がある。

食堂と玄奘三蔵院伽藍・大唐西域壁画殿は秋の特別公開へ向けて準備のため閉鎖中だった。薬師寺見学を終えて、近鉄西ノ京駅へ戻る。12時3分の急行に乗る予定だったが、11時57分の普通電車に乗り、早めに大和西大寺駅へ向かうことにした。12時1分に着き、12時12分発のバスへの乗り換えに少し余裕ができた。

12時20分ごろ朱雀門ひろばに到着。天平うまし館にあるレストランで昼食休憩となった。筆者はうな重(1,880円)と飲み比べセット(春鹿・貴仙寿・稻天:600円)を注文した。あまり手際の良い店とは言えず、食事にありつくまで時間がかかる人が散見された。

午後1時20分に天平うまし館前に再集合して、平城宮跡見学を開始した。朱雀大路と棚田嘉十郎銅像について案内をして、平城宮いざない館に入館。平城宮跡に関するガイダンス施設で、ざっと巡って外へ出た。朱雀門の前で集合写真を撮った。

東の東院庭園へ向かいながら、途中にある兵部省、式部省の跡地を見学し、遠くに見える長屋王邸跡と長屋王について説明した。すすきが生える道なき道を歩きながら、東院庭園を目指す。小子部門では藤原仲麻呂の乱後、天皇の座を奪われ淡路国へ流される時、通った門であることを説明した。東院庭園を横目で見ながら、法華寺へ行く。



平城宮跡第一次大極殿

法華寺の地には藤原不比等の邸宅があり、首皇子(のちの聖武天皇)がいた東宮(東院庭園)と自由に行き来できたようだ。発掘調査で門の礎石が出土している。

不比等没後、娘の光明子(光明皇后)がこれを相続し皇后宮とした。745年(天平17)5月、皇后宮を宮寺としたのが法華寺の始まりである。本尊の十一面観音菩薩立像は、光明皇后の姿を模して造ったと伝わる。からふろを見学して、平城宮跡へ戻る。男性3名が遅れていたので、「待て」をかけたが、元気な女性たちが構わず進軍し、3名が置き去りにされた。3名とは大和西大寺駅で合流することとなった。



法華寺本堂

東院庭園、第2次大極殿、第1次大極殿を見学して、午後3時45分に見学を終了。大極殿の前で全員集合して、最後の挨拶をするつもりだった。ところが、である。二人の淑女が「バスが来るまで時間がない」とバス停へ急ぐ。大和西大寺行きのバスは大極殿側にあるというのに、わざわざ道路を渡り反対側のバス停へ行ってしまった。案内人の言うことを聞かないから、こういうことになるのじゃ。3時52分のバスで大和西大寺駅へ戻り、4時12分大和西大寺駅発近鉄奈良線快速急行(神戸三宮行)に乗車し、鶴橋、大阪で乗り換えた。JRダイヤの乱れがあり午後5時40分ごろ伊丹駅に帰着した。

いろいろなことが起きた旅ではあったが、参加した会員諸氏にとって楽しい思い出の1ページとなつたのであれば、企画・運営担当として望外の喜びというものである。(末次記)

特 集

ユネスコの無形文化遺産になった『日本の伝統的酒造り』とは？

令和6年12月5日、「日本の伝統的酒造り」がユネスコの無形文化遺産に登録されました。日本酒、焼酎、泡盛に味醂（みりん）。酒の種類は知っていても、それを生み出す「伝統的酒造り」とは、どんなことでしょうか。文末に記載の文化庁広報資料、関連Webコンテンツを参考にQ&A形式でその概要を纏めてみました。



Q.そもそも、ユネスコの無形文化遺産とは？

A. 「ユネスコ無形文化遺産」とは、国際連合教育科学文化機関（UNESCO：ユネスコ）が実施している事業のひとつです。祭りや芸能、伝統工芸技術、社会的慣習など、人から人へと伝えられて形のない「生きた文化」を「無形文化遺産」として登録・保護する枠組みとして2006年に始まりました。すでに世界全体では600件以上が登録されています。日本からは、「伝統的酒造り」が23件目。他に能楽や人形浄瑠璃文楽、和紙、山・鉾（ほこ）・屋台行事などがあり、食の関係では和食が2013年に登録されています。

Q.同じユネスコの世界遺産（世界自然遺産、世界文化資産）との違いは？

A. 「世界遺産」は遺跡や自然などが対象で、顕著な普遍的価値のある人類共通の宝を守ることを目的としています。一方、「無形文化遺産」は価値の優劣を問うものではなく、多様な文化を相互に尊重し、理解を深めることを目的としています。また、「世界遺産」は、1972年に採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づく事業に対して、「無形文化遺産」は2003年に採択された「無形文化遺産の保護に関する条約」に基づいた事業であることからも、同じユネスコの事業ですが全く定義の異なる事業であることに留意する必要があります。「世界遺産は自然遺産や遺跡などの有形の文化遺産を対象にしていますが、無形文化遺産は形のないものが対象で、技術や慣習、知識、行事などが対象となります。世界遺産は、顕著な普遍的価値を証明できることなどが登録条件となりますが、無形文化遺産は価値の優劣を問うものではありません。遺産として残すことで、多様な文化を相互に尊重し、理解を深めることを目的としています」（文化庁参事官付専門官・清水大樹）

Q.ユネスコの無形文化遺産に登録された「伝統的酒造り」とは？

A. 「伝統的酒造り」とは、杜氏・蔵人等がこうじ菌を用い、長年の経験に基づき築き上げてきた酒造り技術のことで、その原型は500年以上前に確立したといわれているものです。その技術は、日本各地の気候風土に応じて発展し、日本酒、焼酎、泡盛、味醂（みりん）等の製造に受け継がれています。簡単に言うと、原料である穀物などに含まれるデンプンを糖に変えるときに、こうじ菌を用いていることが最大の特徴で、近代科学が成立・普及する以前から、杜氏・蔵人といった職人の皆さんのが、経験の蓄積によって探し出し、築き上げてきたお酒造りの技術をさします。ちなみに、醤油や味噌も同じく、こうじ菌を用いています。

Q.登録されたのは酒自体ではないということ？

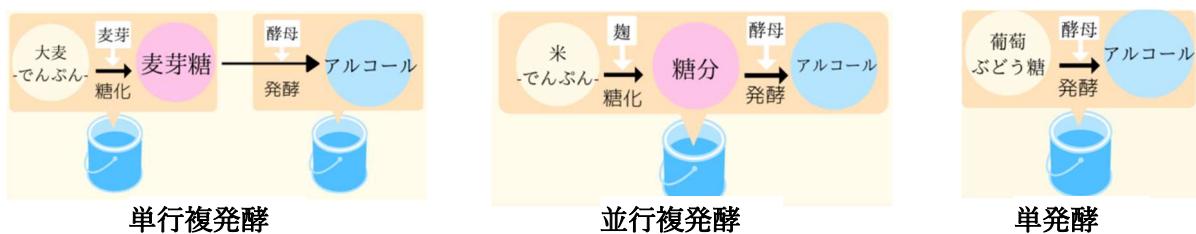
A. 日本酒や焼酎という実体のあるものではなく、形のない酒造りの知識と技術を対象としています。登録されたのはあくまで酒造りの『技術』であり、特定の商品が評価されるわけではありません。そ

そもそも、ユネスコ無形文化遺産は『優れている』からといって登録されるものではありません。特定の文化を優劣で評価するのではなく、多様な文化を尊重し、理解を深めることが本事業の目的だからです。従って、『日本酒はユネスコに登録されたから、あの国のビールやワインよりも優れている』、『並行複発酵の技術は日本こそがオリジナルであることがユネスコに認められた』というような比較は適当ではありません。

Q. 登録された「伝統的酒造りの“技術”」とは具体的にはどういうもの？

A. 2021年に日本の登録無形文化財に登録された「伝統的酒造り」が基準となっています。そこでは、日本酒、焼酎、泡盛、みりんなどの造り方が該当します。技術は大きく3つの工程があります。一つ目の工程は「原料の前処理」です。原料処理の中で米や麦を蒸すことで原料を酒造りに適した状態にする工程です。ワインやビールなどのお酒にはこのような工程はありません。二つ目の工程は「麹（こうじ）造り」です。麹室（こうじむろ）で蒸した原料に麹菌の胞子をふりかけ、麹菌を生育させるために昼夜を問わず繊細な温度管理を行う工程です。言い換えると、原料に含まれるデンプン質を糖に変える（糖化）準備を行う工程です。三つ目の工程は「醪（もろみ）の発酵」です。この発酵は「並行複発酵」という極めて珍しい発酵技術が用いられています。ワインの発酵技術は「単発酵」と言い、収穫したブドウを発酵に適した状態にすれば、自然界に存在する酵母、いわゆる菌の働きで発酵が起こり、ワインが出来上がるというものです。ビールの場合は「単行複発酵」といい、麦に含まれるデンプンを発芽の際の酵素が分解して糖分に変える（糖化）工程と、その糖分に酵母を入れてアルコール発酵させる工程を順番に行います。これらに対して、「並行複発酵」は原料に含まれているデンプンをこうじ菌の働きにより糖に変える（糖化）工程と、発生した糖を酵母の働きによりアルコール発酵させる工程を、同時並行的に行う（ひとつのタンクの中で行う）方法です。この並行複発酵により日本酒は醸造酒として世界でも類をみないアルコール度数の高いお酒になります。以上の三つの工程が「伝統的酒造りの“技術”のコア（核）」になります。

（下図は「日本酒の作り方を世界一わかりやすく解説！簡単な図で全工程を紹介」より引用）



Q. 「並行複発酵」という技術は日本独特のものですか？

A. 日本独特のもののように説明されている記事もありますが、中国の紹興酒、韓国のマッコリ、フィリピンのブボッドも「並行複発酵」という技術でつくられており、日本独特のものとは言い切れないようです。酒造りの技術としては東アジアに分布してみられますが、その理由は判然としていないようです。

最後に、文化庁参事官付専門官・清水大樹氏の以下のコメントで纏めたいと思います。「ユネスコ無形文化遺産は“優れている”からといって登録されるものではありません。登録されたのはあくまで酒造りの『技術』であり、日本酒、焼酎、泡盛等の特定の商品が評価されたわけではないという事。また、ユネスコ無形文化遺産の「運用指示書」には「商業的乱用を回避すべき」という記載があり、過去には実際に「フランスの美食術」が過度なプロモーションから登録抹消の警告が発せられたという

ケースもあります。商業利用が禁じられているわけではありませんが、多様な文化の保護という本質から逸れてはならないという事に留意をする必要があります。(文化庁参事官付専門官・清水大樹氏)」。

日本酒発祥の地「伊丹」のさらなる認知向上、旧岡田家住宅・酒蔵への来訪者の増加が期待される今回の登録。さらに、大阪万博開催に併せて県内各地で展開される「兵庫県フィールドパビリオン」において、伊丹市では街を知り、展示や解説で知識を深め、伊丹酒を味わい、体験するなど、五感で感じる体験型プログラム「清酒発祥の地 伊丹を五感で体感」が計画されています。「伝統的酒造り」の内容を正しく理解して、日頃のガイドにおいても活用していきましょう。 (吉岡 記)

*記事作成にあたり引用、参考とした文献等

- ・SAKEStreet (<https://sakestreet.com/ja/media/unesco-heritage-sake-brewing>)
「伝統的酒造り」がユネスコ無形文化遺産に登録。日本酒のPRで注意すべき点は? (執筆者:川村咲貴)
- ・SAKEStreet (<https://sakestreet.com/ja/media/study-of-application-for-unesco-heritage-sake-brewing>)
「ユネスコ無形文化遺産」への登録を目指す日本酒制度を出発点とした考察 (執筆者:川島泰斗)
- ・日本酒の作り方を世界一わかりやすく解説!簡単な図で全工程を紹介 (美しい日本酒編集部)
(<https://azumarikishi.co.jp/media/sake-brewing>)
- ・政府広報オンライン (<https://www.gov-online.go.jp/article/202410/radio-2480.html>)
ラジオ番組「守り、つないでいこう!日本の伝統的酒造り」

《ガイド勉強会活動報告》

了福寺拝観記 令和7年1月8日

了福寺は、寺伝によると昆陽寺の別院として行基さんによって開基されたといわれており、南野4丁目があり、南野神社に隣接しています。無住のお寺で、地域住民の方々により保存・管理されています。普段は開かれておりませんが、今回、ご好意により、新年の「初薬師」のお参りの日に合わせて、お堂内部に入り、安置されている仏様に参拝させて頂きました。境内には本堂と薬師堂があり、本堂にはご本尊阿弥陀如来坐像、薬師堂には薬師如来坐像及び十二神将像などが祀られています。各自お参りの後、仏様を心ゆくまで拝観させていただきました。また、同じ地域住民の方々が中心的に保存・継承されている「麦わら音頭」についてのお話も、実際の手振りを交えながら聴かせて頂きました。温かな生姜湯と優しい笑顔で歓待してくださった保存会の方々に深謝します。当日は好天に恵まれ13名の参加者があり、地域住民の方々の日ごろからのご尽力に感服するとともに、今後のガイド活動に役立つ貴重な学びの機会となりました。 (久保田・岩崎記)



薬師堂（左）と本堂

令和6年度市民ガイドの予定

第3回 令和7年2月22日(土) 「伊丹空港そばの弥生遺跡」

上記の内容は予告なく変更する場合があります。予めご了承下さい。



活動記録(11月～令和7年1月)

【定例会】

11/19 (火)・12/10 (火)・1/14 (火)

【史跡ガイド】 [□、○人]はガイドコースと参加人数

11/9 (土) [D、28人]、11/20 (水) [A、10人][F、10人]、11/23 (土) [A、4人]

11/30 (土) [A、12人]、12/6 (金) [C、15人]、12/21 (土) [C、9人]

【旧岡田家住宅・酒蔵 団体ガイド】

11/21 (土) 18人

【研修サロン班】 活動記録詳細はP2～P6に記載しています。

【学習支援班】 例 会：11/6 (火)、11/26 (火)、12/17 (火)、1/21 (火)

対外活動：12/8 (日) ことば蔵交流センター（デジタル紙芝居・工作）

1/15 (水) わかばこども園（紙芝居）

1/18 (土) 笹原小学校（デジタル紙芝居・工作）

今後の予定(令和7年2月～4月)

【定例会】

2/11 (火)・3/11 (火)・4/14 (月)

【史跡ガイド】

1/8 (水) [A、20人]、1/18 (土) [A、12人]、

2/22 (土) [第三回市民ガイド、伊丹空港そばの弥生遺跡]、3/7 (金) [A、20人]

【旧岡田家住宅・酒蔵 ガイド当番】

令和7年4月12日から6月29日の期間を予定

私たちと一緒に 文化財のガイドをしてみませんか

当会は、平成8年に伊丹市教育委員会が主催した文化財ボランティア養成講座終了者有志により設立されました。現在約40名の会員が活動しています。会員は郷土の文化財を愛し、学び、それを更に後世に伝える取り組みをしています。また、様々な経験学習から学び得たことを広く市民に還元することを目的としています。

なお、会員には正会員と準会員があります。今年も11月に予定されている文化財ボランティア養成講座（全4回）を受講・修了すれば正会員となります。

ぜひ、私たちの仲間になって活躍の場を見つけて下さい。

■文化財ボランティア養成講座についてのお問い合わせは下記まで。

伊丹市都市活力部まち資源室文化振興課 文化財担当（☎072-784-8090）

